

会議名	第2回 金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想検討懇談会		
日時	2022年12月16日(金) 午後1時00分～午後3時00分		
場所	名古屋能楽堂 会議室 / WEB会議		
参加者	(構成員) 木下直之委員、古池嘉和委員、佐々木雅幸委員、田沢裕賀委員 (オブザーバー) 大竹正芳委員、北折真人委員、木村広聖委員 (名古屋城保存整備室) 鈴木室長、石山係長、林技師 (名古屋城調査研究センター) 村木副所長、原主査、朝日学芸員		
報告日	2022年12月23日(金)	報告者	株式会社三菱総合研究所 廣瀬
<p>&lt;議事内容&gt;</p> <p>1. 開会</p> <p>【事務局】 それでは定刻になりましたので、ただいまより第2回金シャチ横丁第二期整備博物館ゾーン整備基本構想検討懇談会を開催致します。私は本日の司会を担当させていただきます、名古屋城総合事務所保存整備室長の鈴木でございます。よろしくお願い致します。</p> <p>2. あいさつ</p> <p>【事務局】 開催にあたりまして、本来名古屋城総合事務所長の上田よりご挨拶を申し上げるところではございますが、本日急用により出席がかなわなくなりましたので、大変僭越ではございますが、私から代読をさせていただきたいと思えます。</p> <p>【事務局】 「名古屋城総合事務所長の上田でございます。本日はご多用の中、第2回金シャチ横丁第二期整備博物館ゾーン整備基本構想検討懇談会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。本日は第2回の懇談会ということで昨年の3月に第一回の懇談会を開催してから久方ぶりの開催でございます。この間、先生方とはワーキングという形で意見交換を積み重ねてまいりました。これまでの議論を踏まえ、今年度完成を目指している基本構想のうち、本日は第1章から第4章までについてご説明をさせていただきます。</p> <p>この部分は事業の背景や目的、市民と名古屋城との関係、基本コンセプト、整備概要や展示方針などいずれも本事業の根幹をなす大変重要な部分でございます。名古屋城の価値や魅力をきちんと伝え、後世につないでいくこと、また文化観光拠点として市内観光を牽引する役割を担うこと、私たちはこの事業にこれらの期待を寄せ取り組んでいく決意です。</p> <p>先生方におかれましては、私たちの思いがより良い形となるようそれぞれの専門的なお立場からご支援を頂戴したいと思っておりますので、限られた時間ではございますが、よろしくお願い致します。」</p> <p>【事務局】 以上でございます。</p>			

なお、構成員の千田様と高田様におかれましては、本日所要によりご欠席とお伺いしております。

### 3. 議題

#### (1) 博物館ゾーン整備基本構想について

##### ○資料1に基づき、事務局より説明

【事務局】 それでは資料1について、ご説明致します。

資料1の「1.事業の経緯」でございます。本丸御殿の復元を契機に、おもてなし機能の充実、名古屋城周辺の新たな交流と賑わいの場の創出、国内外からのより一層の観光客誘致を図るため、平成24年(2012年)に金シャチ横丁基本構想を策定しました。まず、第1期整備として、平成30年(2018年)3月に飲食店舗を中心とした義直ゾーンと宗春ゾーンを開業しました。その後、第2期整備事業化に着手しまして、令和2年度より第2期整備の一つとして博物館ゾーンの整備に向けた事例調査や検討を行い、今年度は博物館基本構想の策定に向けた作業を進めているところでございます。

続きまして、「2. 令和4年度のスケジュール」でございます。今年度はこれまでに2回、非公開のワーキンググループを開催しました。懇談会につきましては、昨年度末に第1回の懇談会を行い、今日が第2回の懇談会となります。今年度中に懇談会・ワーキング共にあと1回ずつ開催する予定でございます。

続きまして、「3. 今後の予定」でございます。今年度中に基本構想を策定し、来年度から基本計画の策定に移ってまいります。基本計画策定後、設計、工事、と順次進めてまいります。

説明は以上になります。

【事務局】 基本構想の主な概要につきまして、ご説明させていただきました。

ご質問やご意見、ご不明な点がございましたら、承りますがいかがでしょうか。

ご質問やご意見が無いようですので、資料2の説明に移ってまいります。

##### ○資料2の第1章・第2章に基づき、事務局より説明

【事務局】 それでは、資料2の第1章、第2章の部分について、ご説明致します。

「第1章はじめに 前提条件の整理」の「1. はじめに」でございます。  
「(2) 本事業が必要とされる背景」としまして、「名古屋城整備事業からみた背景」と「名古屋観光からみた背景」を記載しました。また、「(3) 本事業の目的」としまして、名古屋城の価値や魅力の発信および後世への継承、日本の城郭の価値や魅力の発信、名古屋観光の魅力向上、の3点を

掲げました。次に「(4) 博物館に求められる新たな役割」としまして、近年博物館に求められる社会的役割が複雑化、多様化し、そのような変化を踏まえた博物館法改正がなされた経緯を記載しました。

「2. 歴史的変遷」でございます。ここでは名古屋城と整備候補区域の歴史について記述し、名古屋城に関する出来事について年表にまとめました。

「3. 現代における名古屋城」でございます。「(1) 歴史、建築の観点からみた名古屋城の意義」としまして、名古屋城が日本の城郭史上、近世城郭の代表的な城であることに加え、近世城郭建築技術の完成期に築城された姿を現代に伝えている数少ない城郭の一つであることから、歴史的、建築的に非常に高い価値を有する城跡である旨、記載しております。「(2) 市民からみた名古屋城の価値、意義」でございます。ここでは今年度実施しましたアンケート調査の結果を踏まえ、全国的にみた名古屋城の認知度の高さや市民の名古屋城への来訪の頻度や目的を説明致しました。特に、市民と名古屋城の関係でいいますと、これまでに名古屋城に行った回数が5回以上と答えた人が半数を占めているうえ、コロナ禍にもかかわらず、この1年以内に名古屋城に行ったことのある人が30%を超えるという調査結果が出ております。さらに名古屋城へ行く目的につきましても、旅行・観光や文化財を見るため以外にも、桜・梅・椿などの植栽を見るためやイベントのため、あるいは散歩のため、といったように幅広い関わり方がみられ、市民に親しまれ、愛される場所となっていることが分かりました。また、市民がとらえる価値としまして、名古屋城が市民にとって心のよりどころ、シンボルとして存在していることについて記述致しました。一方で、アンケート調査結果からは課題もみえておりまして、観光地としての魅力発信や名古屋城の滞在時間の短さなどの課題に対して対応する必要があると考えております。「(3) 今後の名古屋城およびその周辺」では名古屋城をめぐる整備計画や周辺地域の発展の見込み、今後の方向性について記載しております。なお、このページ3の左下には、名古屋城中心に周辺地域との関係性、発展のイメージ図を記載しております。

「4. 整備候補区域の条件の整理」でございます。こちらでは、本事業の整備候補区域と各種の規制項目について説明しております。

続きまして、「第2章 整備にあたっての基本的な考え方」についてご説明致します。

「1. 博物館ゾーンおよび本博物館に求められる機能・役割」でございます。この部分を検討する際、前提といたしまして、本事業の整備候補区域、即ち博物館ゾーン全体の機能・役割と博物館ゾーンの中心的な存在となる博物館そのものの機能・役割、それぞれを検討することと致しまし

た。まず「(1) 博物館ゾーンに求められる機能」としまして、その歴史性や立地の特性から、名古屋城と一体となって名古屋城の歴史や価値と魅力、日本の城郭の特徴を伝える知の拠点と、名古屋観光の受け入れ、周遊拠点として市内観光へといざなう観光の基点としての機能ととらえました。次に「(2) 本博物館が果たす役割」でございます。博物館ゾーンに求められる知の拠点と観光の基点、この2つの機能を実現すべく名古屋城の歴史や価値・魅力を伝え後世に継承する役割、日本の城郭の特徴を検証・紹介する役割、国内外の子供から大人までを対象とする施設とする、最新技術や五感で体感できる展示内容の充実を図る、文化観光拠点として名古屋場周辺の観光地を巡る際に歴史的な背景や名古屋城との関連を想起できるよう名古屋城を起点とした歴史を、ストーリー性を持って理解できる施設とする、このような役割といたしました。

「2. 基本コンセプト」でございます。まず、「(1) 博物館ゾーンのコンセプト」でございます。名古屋城が尾張名古屋の歴史の入口であること、名古屋観光の玄関口や市内観光への基点であること、名古屋城築城が名古屋の街が発展する出発点であること、名古屋城をきっかけに日本の城郭に関心を持ってもらえるようなきっかけとなりうることなど、エリア全体として尾張名古屋の旅の基点となるような方向性を目指していきたいことから、「名古屋城から始まる歴史探訪のゲートウェイ」としました。また、「(2) 本博物館のコンセプト」でございます。名古屋城の歴史や価値と魅力について学ぶことを通して近世以降の名古屋の街の軌跡をより深く学ぶことができる、日本全国の城郭を学ぶことを通して名古屋城の価値や魅力を再発見する、名古屋城では城そのものだけではなく城の背景にある土木技術、建築、自然史等様々な複合的要素を学ぶことができる、あるいは名古屋城には城に関する多岐にわたる記録が残されており、これら資料群を収集、保存、調査、研究を行い、名古屋城の価値・魅力を確実に後世に継承する、戦災により城内の主要建造物の大半が焼失したが、再建に向けた募金活動が広く県下で行われ、名古屋城天守閣は名古屋の街や戦後復興の象徴となった。名古屋城は四季折々の祭りや季節のイベント会場となっていることに加え、市民の日常的な散歩にも使われるなど、市民に広く利用され、愛されている城である。また、これまでも城と市民がともに寄り添いながら歩いてきたように、これからも名古屋の街、名古屋の市民は名古屋城とともに歩いていくことを象徴的に表現する、このような意図を込めまして、「城に学び、城と歩む」と致しました。

最後に「3. 期待される効果」でございます。想定される博物館ゾーンへの来訪者層としましては、城郭などの歴史に関心が高い市民や観光客と観光やイベントを目的として名古屋城を訪れる市民や観光客と考えておりま

す。また、博物館ゾーンの整備により期待される定性的効果としましては、名古屋城周辺エリアの魅力向上による来訪者の滞在時間増加とにぎわいの創出など5点を掲げております。

以上、第1章、第2章の説明を終わります。

#### ○資料2の第1章・第2章に基づき、質疑応答

【事務局】 それでは、先生方お一人ずつから順にご意見を頂戴したいと思っております。五十音順で配席をさせていただいておりますので、最初につきましては、木下先生からよろしいでしょうか。よろしくお願い致します。

【木下委員】 今ご説明いただいた1章と2章に関して、大きく2つあります。

1つは、博物館をつくる、そしてその博物館は未来に向けての新しい博物館ゾーンを目指すという、これが一番の基本だと考えています。言い換えると、まず博物館の基本要件を満たすことが求められます。さきほど博物館法改正の話が出ましたけれど、旧来型の博物館にとどまらずにやはりこれからの博物館がどうあるべきかを考えて、計画の中に盛り込んでいただきたいと思っております。博物館の基本的な性格は、資料の収集、保存、展示、そして研究なので、これは絶対に外せないということです。新しい博物館像の中で、この度の博物館法改正が打ち出してきたものの中に文化観光という言葉があります。これは使われるようになってまだ日も浅い言葉だと思うので、むしろこの博物館が文化観光という言葉の内実、中身を作っていくべきだというふうに思います。我々のワーキンググループの中でもそういう方向性が見えてきているだろうと思いますので、博物館ゾーンの機能を端的に知の拠点、観光の基点と2つ挙げているのはまさにそういうことで、要するに2つが別個にあるわけではなくて、知の拠点であることが観光につながってくる見通しを作ることが重要だと思います。

2点目は、私自身は近代を研究してまいりましたので、是非近代まで視野に入れる博物館であってほしいということをこれまでも申し上げ、そして現段階のこの基本構想にも十分に盛り込まれているように思います。天守の建て替えが一方で進行しておりますが、戦後建てられた現在のRCによる天守の歴史的価値が勿論あるわけなので、仮に壊されるにしても、そのことの歴史、それに関する資料や情報を、この博物館ではきちんと基本的な資料として保存し研究していくという姿勢をもっていたいただきたいと思います。また、この博物館は近代を視野に入れるだけではなくて、名古屋城にとどまらずに日本の城郭について学ぶ拠点を目指すということで、これもこの基本構想の一番重要な柱だと思ってしっかりと仕掛けられてると評価したいと思います。

2つのコメントは以上ですが、第1章、第2章を見ながら思ったことは、

名古屋城の魅力が十分に伝わっていないとするなら、「名古屋城の魅力ってなんだろう」という観点から意見を交わし、問題点を整理し、その魅力の発信はどうあるべきかを考えることが大きな課題としてあると思います。以上です。

【事務局】木下先生、ありがとうございました。議論は後程するとして、続きまして、古池先生、よろしくお願い致します。

【古池委員】博物館を核としたネットワークに関して、今回のコンセプト上の名古屋城から始まる歴史探訪のゲートウェイがコンセプトになっているので、名古屋城の新しい魅力を付加されることによって、どう市内全体を連携していくかという話になるかと思います。その意味を踏まえると、3ページの【名古屋城を巡る整備計画・発展のイメージ図】については、丁寧に描いた方が良いと思っております。城を中心に描いていただいたのは非常に図としては良いですけれども、流れに向かった軸線が新しい観光軸となっていますが、この軸の意味を持たせていくことが大事だと思います。名古屋市中心に伊藤家住宅の整備が今同時並行で進んでいるので、四間道、円頓寺も含めて最終的には名古屋駅に向かうというあたりを整理しつつ、水陸両方のネットワークが街づくりとして動いておられますので、街道筋を生かした動きとかあるいは水運などの視点も含めて軸の意味をしっかりと押さえていくことが必要になるんだということだと思います。

もう一つ気になるのは、真ん中のセントレアに向かっていく軸について何の意味があるのか、恐らくインバウンドを見越したものだと思いますが、こちらは名古屋城を基点にハの字になるとすると、栄に向かう軸があり、時代的には近代遺産を含めて歴史のステージではグラデーションがありますが、栄とその間にある久屋大通という、名古屋市もウォークブルという観点で街を歩いて楽しむという話も進んでおります。その観点を踏まえると、ハの字になって名古屋駅に向かう歴史の軸と栄に向かう軸、それから今すでに動いている徳川園に向かういわゆる文化の道といった軸、西に向かう伝統産業の軸はよく分かりませんが、そういう形でそれぞれの拠点に向けて名古屋城を中心とした先ほど申し上げたゲートウェイとしての実態を今動いている活動をベースにしながら新しい軸を動かして行って、名古屋全体、名古屋城の整備をネットワークのコアとして活かしていくという方向性を、もう少しこの図に反映していただければいいかなと思います。

【事務局】古池先生、ありがとうございました。続きまして、佐々木先生、よろしくお願い致します。

【佐々木委員】名古屋城については、幼少の頃から出向いておまして、名古屋市民のアイデンティティはよくわかります。その点からすると、本丸御殿の再建が行われ、次いで天守閣の再建という大事業を成功させようということは名

古屋市民にとってはアイデンティティのうえで重要だと考えております。私が生まれたときは、天守は焼失して存在しなかったんですね。その後のコンクリートの天守は、何回も中に入っています。そのたびに思うのは、やはりかつての本格的な木造の軍事施設としての名古屋城というものは一体どういうものだったんだろうか、ということを考えるわけです。それが今回長い年月を経て再建されるということが、大変意義深いと思っています。

一方で、これまでの天守が持っていた博物館機能を引き継ぐものとして、名古屋城博物館という形で施設をつくる、というこの事業そのものは私は大変有意義であると思っています。

名古屋は、やはり観光都市としては未熟ですが、立派な産業都市であり、現代の日本の経済を引っ張っている大都市ではあるけれども、残念ながら、特に文化観光の面からいうと、やはりまだまだだと思います。今私は金沢に住んでおり、京都にも長いこと住んでいましたが、京都や金沢に比べまして専門的な美術館、博物館が少ないという事があります。そういった意味で、城郭を中心にした博物館を置くということは文化観光、観光都市という観点からしても、名古屋の文化都市としての格を一つ上げていくという意味で良いと思います。そういった意味で、1章、2章は前提条件としてしっかりとまとめられている。

私は3年前、国際博物館会議が京都で行われたとき、出席しておりました。そして、博物館再定義というテーマに対し、その場ではまとまらなかったのですが、その時に多面的な意見が出され、博物館は何が大事なのか、博物館が地域住民にとってどんな意味があるのか、コミュニティにとってどんな意味があるのか、ということがかなり議論されました。要はコミュニティにとって、開かれた様々な議論が行われる場、広場であるというようなことが議論されたんですね。例えば、インクルーシブという言葉で、地域社会を包摂するという意味で、新定義でもまとまっております。その意味でいきますと、やはり第一に名古屋の市民にとって近づきやすいものであって、インクルーシブであることが、第一の機能だと思います。その上で、観光の基点となるということだと思います。それを改めて確認をしておきたいということです。

つい最近、私は私の孫を連れて名古屋城へ連れて行きました。その時の目的は何かと言うと、今小学校でもコロナ禍で名古屋城へ行くことが無い中で、初めて小学生の孫を連れて行ったわけですが、そこで行われている現代アート展（ストーリーミングヘリテージ）でした。名古屋城そのものも歴史的な文化財ではあるんですけども、それを歴史の中においておくよりは、現代アートと組み合わせると、実に面白い組み合わせですよ。例え

ば京都の二条城でも 2017 年以降、現代アートを城の中で展示するという  
ことをやっているんですけども、ある意味で、本施設に関しても、そう  
いう多様な文化的な場であって、今回は屋内の展示と屋外の展示があり、  
それらを多様に使っていかということとは重要だと感じております。以上  
でございます。

**【事務局】** 佐々木先生、ありがとうございました。続きまして、田沢先生、よろしく  
お願い致します。

**【田沢委員】** 今回の博物館ゾーンの整備にあたり、特別史跡に名古屋城跡が制定されて  
おり、その保存活用計画に基づいてどのようなことをしていくか、という  
中で、一番大きいのはやはり名古屋城が復元されることだと私は考えてお  
ります。これは単に新しいものをつくるということではなくて、名古屋城  
の場合は大変資料が多く、写真があり、細かいデータをとってきた図面が  
あるということで作られる城です。単に木造というだけではなくて、江  
戸の初期につくられたものが同じようにつくられる、神社建築が何十年か  
おきにつくられる、それでも新しいけれども昔のものがそのまま継承され  
ている、と同じようなことでつくられるわけですから、この意義は大変大  
きい。単に木造にするということだけではなく、城郭史としても大事。ま  
た再建にあたって、色々なものが発見されてくるだろうし、その作業自体  
も重要な歴史的な行為になると考えております。これは名古屋城以外では  
できないことだと思います。それで色々技術も分かるだろうし、神社建築  
が何十年かおきにやられるのはその技術を保存していくということでは  
しょうから、同じように今回精査してつくられていく中で、江戸期の城郭建  
築のもっていた技術なども出てきつつ、石垣がどう組まれてどうだとい  
うことも含めて、またとない城郭の価値、魅力を確認し、それを再発信し  
ていく場としての博物館があつてよいのではないか、それが名古屋城の  
価値だろうと、それを観光にどう結び付けるのかということかと思いま  
す。

近年、文化観光に頼らなければ地方はなかなか産業がない、という現実  
があるんだと思います。しかし、名古屋は経済都市としても十分な成長を  
遂げております。その意味で、観光にどれだけ頼らなければならないのか、  
名古屋の場合は少し違うのではないか、より本質的なものを極めていく  
ことによって、それが今の観光ではなくて 10 年 20 年 30 年というような長  
いスパンの中でより重要性をもってくることにより、将来的にも大きな意  
味をもち、そこを見たいという人が来るような観光のところになるんでは  
ないかと基本的に考えております。

アンケートで確認した、最初の市民からみた名古屋城の価値や最後の名古  
屋及び名古屋城の課題という項目がありますけれども、これらは全国的な  
視点とも捉えられるので、全国からみた視点なのか、市民の視点であるか



分かるように記載いただければと思います。

博物館としての機能としては、やはり本物にこだわるべきであると考えます。障壁画は本物が伝わっています。本物をうまくつなげていくことによって、新しくつくられた天守の価値を再度確認できるような施設にするべきであり、そのためには登録博物館や公開承認施設という展示のための必要な要件は、必ず果たしていかなければ、その後の計画に大きく影響するものだと思います。

そして、戦後の復興期につくられた天守閣をはじめとして市民とともに歩んできたということもありますから、観光という外からのインバウンドだけではなくて、市民にとっての観光と同様の価値というものを全面的に出していくことが大事だと思います。そういう意味でも博物館のコンセプトである「城に学び、城と歩む」、この主体は名古屋の人々であり、この城を愛しこの城に来る多くの人たち向けである、このコンセプトについては、私は大変賛成でございます。ぜひ、保存活用計画に合わせながら本物を展示し、それを通して名古屋城の魅力を感じ、そしてその意義を世界に発信するような施設になっていただければと思いながらこの基本構想を拝見いたしました。

【事務局】 田沢先生、ありがとうございました。本日ご欠席となってしまいました千田先生からもご意見を頂戴しておりますので、そちらを代読させていただきますので、よろしくお願ひします。

【事務局】 千田先生からいただいたご意見を紹介します。第1章・第2章の部分につきまして、3つのご意見をいただきました。

まず1ページの第1章「1. はじめに」の(2)について、「本事業が必要とされる背景」といたしまして、今、整備事業からみた整備面、観光面の背景を書いておりますが、この前提として、特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解促進と魅力向上への取組という視点を明示の方がよいのではないかというような助言をいただきました。その通りでございますので、背景の前に、一つ項目を追加致しまして、特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解促進と魅力向上への取組ということを書く方向で検討しております。

続きまして2点目ですけれども、名古屋城には、今でも多くの重要文化財など本物の文化財が残っているということで、本物を多く見てもらうことが可能な特別な場所だということを知りやすい形で示すべきではないかというご意見をいただきました。それを踏まえまして、1ページの第1章の「現代における名古屋城」の「(1) 歴史建築の観点からみた名古屋城の意義」の後に、(2)を追加し、名古屋城に残る指定されている文化財一覧などを加えてみようかなと考えているところです。また、巻末に指定

の経緯や説明文について、参考資料として掲載しておこうと検討しているところでございます。

3点目です。同じく「現代における名古屋城」の中ですけれども、「歴史建築の観点からみた名古屋城の意義」という部分に関しまして、ここでは名古屋城の価値について、特別史跡の構成要素や、豊富に残る史資料というのを書いてございますが、それ以外にも重要文化財、美術工芸品などいわゆる有形文化財なども多く残されているということなので、それも書き加えてはどうかというようなご意見をいただきました。こちらも加筆する方向で検討しております。以上でございます。

**【事務局】** 千田先生のご意見も含めまして、ディスカッションしたいと思いますので、もし他の先生のご意見をお聞きされた上で追加のご意見がございましたら承りたいと思います。

**【事務局】** 事務局からまずいただいたご意見を踏まえて発言させていただきます。

木下先生のご意見の中で文化観光の施設として大いに役割を期待されるというようなお話をいただきました。我々も近年の博物館としての役割、求められる社会的な役割ということを踏まえまして、文化観光の基点や、ある意味モデルケースとなるような施設を目指していきたいと考えてございます。

古池先生からいただきました3ページの名古屋城を中心にしたゲートウェイのイメージ図について、ご指摘のとおり、名古屋城と栄地区を結ぶこの現代の繁栄軸がセントレアまで抜けておりますけれども、やはり市内を中心に考えるということが大変重要です。従って、名古屋城と栄地区を結ぶ現代の新しい繁栄軸という観点で、図を修正してまいりたいと思います。

佐々木先生にご意見をいただきました、地域住民、コミュニティにとって博物館がどんな意味か、インクルーシブがまずあってからの観光の発展だというようなご意見をいただきました。我々は、名古屋城というものは市民の宝であり、市民とのまず関わりというのが大前提にあった上での観光と思っておりますので、市民との関係、インクルーシブ、地域住民との関わり方というのをきちんと検討してまいりたいと考えております。また、屋外展示についても様々な工夫をして楽しんでいただけるような、子供から大人まで国内外の観光客も踏まえて楽しんでいただけるようにしたいと考えております。

田沢先生のご指摘でございますけれども、木造復元を踏まえた上でということですが、我々も今後木造復元を進めていく中で、あるいは博物館を新しく建造していく中で、新たな発見というものが当然出てくると思っております。そういった新たな発見をまた発信していくことも非常に重要と思っております。長いスパンを考えて検討してまいりたいと考えておりま

す。また、博物館としても、登録博物館や公開承認施設としての資格を取得しつつ、またあるいは本物を見せるためにきちんと文化財を収集して展示できる体制を整えていきたいと考えております。以上でございます。

**【木下委員】**先ほどの千田先生のご指摘で、1 ページの3の(1)については、はっきりと歴史・美術・建築と入れるのが良いと考えます。実際、障壁画というのは貴重な資産だと思います。

田沢先生のご指摘というのは私も考えていて、天守の再建、木造による再建というのは想像を絶するような大工事になると思います。改めて本丸御殿の工事風景等々の資料を見てきたけれども、平屋でもあれだけの大工事だったわけです。そのことによって得られる様々な知見だとか情報は、膨大なものが、今後出てくることを考えると、博物館はできるだけそれをしっかりと引き受けるのが望ましいとは思っています。

名古屋城の価値として、1945 年まで当時の姿で存在しており、しかも非常にいい状態で存在して、それにまつわる情報も莫大な情報があると思います。博物館がこの情報をどのように受けとめられるかが問われるものだと思います。思いながら聞いてました。

**【事務局】**ありがとうございます。

知の拠点と観光の基点について、木下先生も別々のものではないとお話をされてましたし、地域社会を考えた上で、この間にあるものは、とても意義のあることではないかということ先生方のコメントから再確認させていただきました。

また、田沢先生のご指摘についても、どうしても我々は特別史跡の仕事をしているという意識が強いので、どうしても美術的な価値があるもの、有形文化財等の検討に偏ってしまう時がありますので、そこはしっかりと検討していきたいと思っております。

**【事務局】**本日いただいたご意見の中で、天守の建て替えのご意見をかなりいただきましたので、これに関していくつかお話させていただきます。

まず現在の天守閣なんですけれども、こちらは SRC で造った天守なんですけど、耐震性に課題があるということで、お客さまに入っていないということで今閉館しております。将来的には計画の中ではそれを建て替えていこうということですが、確かに SRC という点で本来のものではないんですけど、戦後に市民の方の寄付も得て、一部県民の寄付も得て、建てたものですので、こちらの記録も重要だと私どもも認識しておりますので、そちらについても資料を集めて、現在、現天守閣の価値と評価といったところをまとめております。今後も含めて進めていきたいと考えております。

合わせまして、調査の中で、新たな知見が大きく得られるというご意見を

頂戴しましたけれども、確かにおっしゃる通りで、石垣の調査はこれに合わせて数年継続してやってまいりますと、天守の計画変更を示すような遺構が見つかるなど、新たな知見が出てきてますので、そういったものも復元に活かしていきたいと思っております。

#### ○資料2の第3章・第4章に基づき、事務局より説明

【事務局】 それでは第3章、第4章の部分についてご説明致します。

「第3章 博物館ゾーン概要」の「1. 整備の方針」でございます。博物館ゾーンの整備方針、本博物館の整備方針、それぞれにつきまして、4点記載しております。また、下の表では、本博物館と近隣の歴史をテーマとした博物館との比較、城内にある既存の施設との比較を掲載しております。また、それら近隣の博物館をはじめ、全国の施設との連携を図ることを目指してまいります。

「2. 博物館ゾーン概要」でございます。整備候補区域のゾーニングとしまして整備候補区域の施設として検討している屋内博物館、屋外博物館、遺跡、観光誘客施設、周遊拠点と便宜施設である駐車場についてその内容を記載しました。またその下には、必要な施設のイメージと動線について図示しております。

「3. 本博物館に必要な機能」でございます。名古屋城博物館に必要な機能とその内容を記したうえで主な諸室を掲げております。また、「4. 本博物館の観覧者動線の考え方」と「5. 本博物館の諸室の機能構成」ではその内容とイメージ図を右側に記載しております。

次に「6. 博物館ゾーンに必要な機能」でございます。さきほどの「2. 博物館ゾーン概要」の必要な施設でも言及いたしましたが、博物館ゾーンに必要な機能としまして、観光誘客機能、周遊拠点機能、便益機能を想定しております。

続きまして、「第4章 展示方針」についてのご説明です。

「1. 展示ストーリーの考え方」でございます。本博物館が名古屋城の歴史や価値、魅力を伝え、後世に継承するという役割をまずは担っていく必要があることから、名古屋城特有の歴史、事物に関する展示を歴史軸に沿ってしっかりと行っていきます。また、名古屋城は城郭として旧国宝の第1号でもあり、近世城郭の最高峰であったことから、日本の城郭史上名古屋城が占める位置づけを明確にし、明確にするためにも、日本の城郭史の展開につきましても歴史軸に沿った展示をしっかりと行いたいと考えております。このように歴史軸に沿った展示としましては、名古屋城史と日本城郭史、この2本を大きな縦軸として検討してまいります。また、名古屋城史に関しましては、横軸としまして名古屋城の空間構成に沿った展示を

考えております。単なる歴史の時系列的な展示だけではなく、空間構成を組み合わせることによって、観覧者の皆さんの理解に空間的な広がりや深みをもつていただけるよう目指していきたいと考えております。

最後に「2. 展示の方針、全体方針、展示手法」でございます。名古屋城に関連する様々な実物資料を常時公開することを基本としますが、最新技術の活用や屋外展示空間を工夫するなど、様々な来訪者層に満足していただける内容を目指します。また、調査研究機能を充実させるとともに、市民講座、体験活動、リファレンスなどを通じて来訪者の満足度を高める活動を継続的に実施していきたいと考えております。

以上、第3章第4章の説明を終わります。

### ○資料2の第3章・第4章に基づき、質疑応答

【事務局】 それでは、先生方お一人ずつから順にご意見を頂戴したいと思っております。まず、事務局より千田先生・高田先生のご意見を紹介させていただきます。

【事務局】 まず、高田先生から1点ご意見をいただきました。

第3章の左下の他の博物館との連携の在り方について、こちらに近隣博物館との連携ということで、名古屋市博物館や徳川美術館を書いておりますが、こちらに大津通にある「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」を入れたらどうか、名古屋城に関連する資料もあったのではないかと、というようなご意見をいただきましたので、こちらも載せる方向で検討していきたいと考えてございます。

【事務局】 続きまして千田先生より、4点のご指摘をいただきました。

まず、本事業が必要とされる背景の視点に、整備面・観光面の前提としまして、特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解と促進と魅力向上に取り組むという視点を明示するべきだという助言をいただきましたので、こちらでも第3章の最初の博物館ゾーンの整備方針に、そのような視点を踏まえた記載を検討しようと考えてございます。

続きまして、「本博物館に必要な機能」について、名古屋城における調査研究機能のより一層の充実が重要ではないかということです。調査研究機能に重きを置いた書きぶりにしたらどうかというようなご意見をいただきました。従って、文中の表現や表の順番を含めて、書き方を検討していこうかなと考えてございます。

また、同じこの表の中ですが、市民アンケート調査結果などからも市民が求めている展示内容は、国宝や重要文化財など貴重なものの実物展示のご意見が多かったです。従って、それらの展示物をきちんと収蔵できる、保管に耐えうる施設とするべきだ、というようなご意見をいただきました。

で、この収集保存機能の内容としまして、収蔵スペースの十分な確保や収蔵庫の機能の充実を追記しようと考えてございます。

最後 4 点目ですけれども、展示ストーリーの考え方について、名古屋城を中心に日本の城の特色と歴史を国内外の人に分かりやすく示す、日本の城の総合的な博物館ということは他に全国にも例がなくオンリーワンの施設としてとてもよいのではないかと、という意見をいただきましたが、さらに目標を広げて、世界の城も紹介して世界的視点から日本の城の特徴を検証紹介してみても面白いのではないかと、というようなご意見をいただきました。それを踏まえまして、実現できるかという観点も含めて、日本の城だけではなくて世界の城をご紹介するというのも検討してまいりたいと考えてございます。

【事務局】 それでは、田沢先生、よろしくお願い致します。

【田沢委員】 第 3 章の整備方針について、有料か無料か、市民か観光客かによって、全然対応が違うと思います。P.4 に博物館ゾーンの想定する来訪者及び期待される効果というところがありました。想定する来訪者は、一方では関心の高い市民や観光客、これはプロ目線をもった本当に城郭が好きな人、一方では観光やイベントを目的として訪れる市民や観光客、これらの層の関心が違うと思うんですね。有料でも関心の高い人たちは内容が良ければ来るだろうし、一方、観光客は短時間で回るため、それに応じた展示の仕方になるでしょう。また、市民が頻繁に訪れる、気楽に訪れる場所とするかどうか、専門性の深さと関わってくるのかと思います。それを視野に入れた上で博物館ゾーンの整備方針というのは、もう少し考えてもいかなという気は致しました。

そして、p.5「博物館ゾーンの整備方針」の 3 つ目に来訪者がストレスなく快適に過ごせるよということがありますけれども、障害者や海外からのインバウンドの来場者の方々に、どのようなストレスが発生するのか、それにどう対応するのかということも、今後の基本計画検討の際には、視野に入れておくことかと思えます。

また、文化庁と相談した上で、指定文化財等を展示できるような施設にし、博物館 IPM との関係でも城郭ということで自然とのかかわりの多い空間になりますので、そういう視点を入れるのも大事なことかなというふうに考えました。

整備対象区域のゾーニングですけれども、バックヤードが大変広く必要だと思います。それらを視野に入れた上での必要面積を考えないと、将来展覧会、特に城郭というようなテーマで行う場合、輸送の時にも巨大なものがある可能性があります。実際に運営してる中では、そのような場所がない場合はその箱をどこに置くのか、極端な話、箱を一回解体して、もう一

回返却の時には組み立てるなどというところもあるように話を聞きます。バックヤードに関しては十分に考慮した上でつくっていただきたい、そういう視点も入れていただきたいなと思います。

駐車場がございませけれども、全部どんな時にでも対応できる駐車場というのはなかなか無理でしょうから、ゾーニングの中だけではなくて、少し視野を広げた上で果たしてどれくらいいるのかと考えた方が現実的かと思えます。

続きまして、「3. 本博物館に必要な機能」がありますけれども、本丸御殿はバーチャルではなく本物の空間であり、体感できる空間です。ただ博物館には本物はない。天守や本丸御殿との関係をつなぐガイダンスの意味を込めた場所になるかと思えます。市民アンケートの中では、国宝や重要文化財などの展示、そして実物の展示というのを求める意見が圧倒的に多いですね。やはり博物館の中で今後そこが一つの重要な肝になるし、それだからこそ復元される天守とのつながりというのが出てくると思えます。市民は当然博物館には国宝や重要文化財が展示されるんだということを考えていることを考えれば、現在の江戸時代の障壁画がどのような関わりで博物館と関連するかは、非常に重要な点、一番重要な点ではないかと思えます。

博物館の観覧者動線の考え方がありますがけれども、これは博物館にどれくらいの時間滞在するのかと関連する問題かと思えます。観光客は決められた30分、1時間という中で回るルートになるでしょうし、関心が高い人は大変長くいるだろうと。それらを両方満たす、複数の視点をもった経路を想定してつくっていく必要があるんじゃないかと感じました。

展示ストーリーを構成するという点については、歴史軸と空間というのは概念的には想像できるんですが、なかなか具体的なイメージが付きにくいので、これは来年度以降の基本計画や設計と関連する段階での検討とは思いますが、今後のまた進展の中で、検討だと思っております。

**【事務局】** ありがとうございます。それでは、佐々木先生、よろしくお願い致します。

**【佐々木委員】** 屋内の展示について、特にリピーターを考える場合、企画展示がしっかりしてないとうまくいかないと思います。私が大阪市大の教員だった時に、大阪城について、フランスのナント市との友好城郭提携に立ち会ったことがあります。双方の都市の美術館と資料館の提携がありまして、例えば名古屋城というのは海外の城との姉妹関係みたいなのはあるんでしょうかね。もし将来あるとすると、海外の城、城郭美術館と名古屋城博物館が提携をすることがあれば、それは企画展のアイデアとして考えられるかと思えます。

【事務局】ありがとうございました。それでは、古池先生、よろしくお願い致します。

【古池委員】「城と歩む」というこのコンセプト、私は非常に気に入っております。「これまでも城と市民が寄り添いながら歩いてきたように、これからも名古屋のまち／市民は、名古屋城とともに歩いていくことを象徴的に表現している」というのは言葉としてはその通りだが、実際それをどのように具体的に実現していくのかが重要だと感じます。その意味では、市民への裾野の広げ方としては3つあると思います。

1つ目は、教育課程の子供たちに関心をもってもらうことがやっぱり大事です。アンケートにも、子供たちへの展示の話が出てきておりました。

2つ目は、江戸期の城下の暮らし・生業について、現在と何か関連付けていけるのかどうかということです。これは名古屋市の別途佐々木先生が座長でおまとめになられた、2025年に向けた名古屋市の文化芸術推進基本計画の中では、「芸どころ名古屋」というコンセプトなんですね。名古屋の芸術文化をこれから振興させていく点との接点が博物館にありうるかは検討が必要だと思います。

3つ目は、サービス機能が重要だと考えます。ミュージアムショップも然り、もう少しプロモーションに向けた施設かもしれませんし、本来の研究教育展示からするとオプション的な機能ではあるんですけど、要するに裾野を広げて関心をもってもらうか、関わっていけるかに向けた努力が必要だと感じます。

「城に歩む」というコンセプトを、どう具体的に実現していくか、議論の余地があると思いますので、問題提起させていただきたいと思います。

【事務局】ありがとうございました。それでは、木下先生、よろしくお願い致します。

【木下委員】やはり調査研究というのはベースだと思いますので、これは一番重要なので肝に銘じていただきたいと思います。

その上で、やはり収集保存の保存について、収蔵庫はきちんとつくることをぜひ考えていただきたいと思います。

時系列に沿った展示について、名古屋城だけではなくて城郭の歴史を見せるというのは大変いい展示コンセプトだと思います。一方で、空間構成に沿った展示については、実現できれば魅力的なので目指して欲しいとは思いますが、城を中心とした秩序が、どのように都市を覆っていたかだと思うので、そこを理解してもらえそうな展示が実現できればいいなと思います。こういった現代の都市とは違う空間構成とか秩序っていうのは、異文化理解や文化観光が特に追い求めるべきことの一例かなと思いました。

「知の拠点」と「観光の基点」というこの2つの提示の仕方はもう少しきち



んと整理しないとイケないのではないかと思います。言葉の使い方についての整理が必要だと感じます。「知の拠点」については「城に学び、城と歩む」につながっていくからいいんだけど、「観光の基点」については、「基点」という表現がまだ固まっていない印象を受けます。「基点」というと起こる、起きる、出発点みたいな感じもするし、本当に源泉みたいな、そこからすべてが始まるってというような意味合いもあるだろうし、いずれにしても、基本構想を端的な言葉で示していくときに、「城に学び、城と歩む」はいいとしても、「知の拠点、観光の基点」については、もう少し練った方がいいかなっていうことを思いました。

それから最後に、話題提供のような感じですが、明治5年に町田久成が関西に行く途中に名古屋城に立ち寄り、名古屋城の天守を見て、これを博物館にすべきだという提言をしているんです。ロンドンのロンドン塔を引き合いに出して、ロンドン塔の中には世界中の武備、武具、それから武器が展示されているため、日本にもそのような博物館が必要なんだということはかなり早い段階で提言した例があります。名古屋城が博物館を今つくるということが、どのくらいの起源をもつのかっていうことを考えたときに、町田久成の考えにイギリスの城があったというのがとても面白いと思います。以上です。

**【事務局】** 色々貴重なご意見ありがとうございました。

木下先生のおっしゃった、非常にシンプルではありますが、一番基幹的な部分ですね、名古屋城の魅力とは何か。これ自身は当然のことながら分かっているつもりではいるものの、それを我々が外に対して発信できているかどうか、これは自問しなければいけないことですし、当然この新しい博物館をつくるにあたって、これがやっぱり根幹になってくるんだろうと思います。

田沢先生がおっしゃるように、確かに名古屋城の価値を十分発揮できているか。様々な文献含めて資料があるからこそ現在の天守再建ができているということについて、名古屋市民の方が知っているかどうか。まず博物館にしても、我々行政がつくるわけではなく、それを育てていくのはやはりそこに住む方々、少なくとも最小単位としても名古屋市の方に支持してもらい、これはやっぱり重要な施設だ、これは大切なものだ、名古屋城は本当にいいものだということ発信していかなければならないわけですし、そう思ってもらわなきゃいけない。目指すべきところはそこにあると思っています。

手法的な部分も含め、確かに田沢先生がおっしゃるように、空間構成をどのように見せていくか、これも挑戦していかなければいけないと思います。テクノロジーで解決できる部分とそうでない部分が結構あると思いま

すので、本日肝に銘じて検討してみたいと考えております。

**【事務局】**今日は先生方、色々貴重なご意見賜りましてありがとうございました。

先生方のおっしゃるように、名古屋城は失われたもの、つまり天守とか御殿、そういったものは巨大であり、膨大でございますが、失われていないものもまた膨大で様々なものが残っております。今申し上げたように、特別史跡の土地、重要文化財の建物・美術、それから天然記念物、そういったものが豊富にございまして、それからまた名古屋城の特性として、名古屋城がもっているそういった重要文化財だけではなく、周辺に徳川美術館や名古屋市博物館があり、特に名古屋市博物館は市民の資料も充実しております、これらと連携することによって、もっと名古屋城の魅力を伝えることができるというふうにございまして、今日改めて思いました。

名古屋城の展覧会をやっていて非常に常に感動するのは、すべてのものが結びつくし、糸を手繰るように展覧会を構成していくことができるんですね。こういったことができるのは名古屋城しかないとは私は日々自覚しております。それをお客様も分かってくださるようで、名古屋城という土地の中で名古屋城に関する資料を見る、これがすごくお客様が楽しんでいらっしゃるなということを日々感じます。特に昔の天守閣の時は実はお客様はあんまりものを見ていなかったんですね。たぶんお客様は観光にいらっしゃって、観光は行った時点で目的が達成されてしまうため、後は帰っていただくので、自分の速度に沿って展示室も歩いて行かれたんですけども、西の丸御蔵城宝館という小さな美術館もできまして、そこにいらっしゃるとちょっと観光から切り離された新しい空間にお客様がいらっしゃるみたいで、前とはまったく違ってちょっと足を止めて作品をご覧になる、そういう情景が最近目にするできるようになりました。そういった意味でも新博物館は今までの名古屋城にはない新しい施設になるのではないかと考えております。今日も先生方にご意見賜りまして、新博物館に対する期待がすごく膨らんでまいりました。どうもご意見ありがとうございました。

**【事務局】**姉妹城郭とか姉妹博物館という観点であまり考えたことがなかったので、ぜひ検討したいと思っております。名古屋市の姉妹都市は、ロサンゼルス、メキシコ、シドニーなどですが、この辺りの城郭はあまり思い浮かばないんですけど、南京、ランス、トリノ、この辺りはなにかあるのかなと思っておりますし、パートナー都市として、タシケントや台中は可能性としてはあると思っております。

**【事務局】**一度オブザーバーのお三方に少しご意見をお伺いしてもよろしいでしょうか。それではまずは大竹様、お願いできますでしょうか。

**【大竹オブザーバー】**今回資料の中に書いてありますように名古屋の観光魅力向上とい

うところでの、新しい名古屋城博物館への期待という大きいものがござい  
ますけれども、正直ある意味ここに置かれているロケーションでは、アク  
セスが厳しいかなと感じます。今回博物館ゾーン、博物館としての整備を  
されるのであれば、合わせてそういうところは関係部局とも連携していた  
だきながら、回遊性とかアクセスのしやすいようなものになるように、是  
非考えていただけるとありがたいなと思います。

それから先ほど先生がおっしゃいましたけど、やっぱりサービス機能とい  
うのが私は関心が高く、やはり博物館に行かれて学び楽しむということは  
非常に大事だと思うんですけど、観光に関係するってことはやっぱり食は  
欠かせないですね。食あるいはお茶を飲んで休憩するとかですね、さら  
にはお買い物をする。そういうことが、博物館の中で難しいとしても、名  
古屋城エリアで受け入れられるような形にしないと、観光という部分では  
魅力がちょっと難しくなるのかなと思いますので、そういう視点も是非お  
忘れなくお願いしたいなと思います。

そういう意味でいくと、資料1に「世界の金シャチ横丁」と書いてあるよ  
うに、市民の方々は勿論ですが、世界からお客様にきていただきたいなと  
思います。インバウンド・海外のお客様や、障がい者の方々にもやっぱり  
来やすくストレスなくご覧いただける、そのような整備は必ず必要だと思  
うので、お忘れなくお願いしたいなと思います。

最後に、市民の皆様様のアンケートの中で、名古屋城の次は熱田神宮です  
ね。整備計画のイメージ図を見ると、南北の中でやはり熱田神宮っていう  
のは南にあるんですね。名古屋城と熱田神宮はセットで考えて、観光の2  
大スポットとして、もちろん名古屋城が中心になると思うんですけど、名  
古屋に行ったら必ず2つ見て帰っていただけるくらい、そのくらいの気持  
ちで意識をもっていくとよりいいかなと思います。

**【事務局】** 大竹様、ありがとうございます。それでは北折様、お願いできますでし  
ょうか。

**【北折オブザーバー】** 私も観光の視点から述べさせていただきますが、整備計画の中  
で、「知の拠点、観光の基点」といった形で、非常にうまく整理していただ  
いている。観光の部分で申し上げますと、今後新しくできる博物館の中  
で、当然将来的なことも考えてですけども、例えば、年間の入館者数の  
想定や、年間の収入の見込みなど、様々な部分で検討が必要になること  
が、今後出てくるようなことがあるかとは思いますが。

そういった部分とは別に、一般の観光客の方にも非常に楽しい施設にして  
いていただきたいと感じます。当然「知の拠点」といった部分で整理を  
していただけてますけれども、歴史学習あるいは調査研究成果の発表や情  
報発信といったところは非常に重要な役割を担っていかれると思うのです

が、それとは別に観光の基点として、ワクワク感だとかドキドキ感、楽しさや楽しみの演出みたいな観点も非常に重要だとも思っています。特に名古屋城では全国的にも非常に早い段階で名古屋のおもてなし武将隊というエンタメ性の高い成功事例を実施していらっしゃるわけですから、その延長で色々考えていっていただける部分も出てくるかなと考えております。それと、最新技術で AR や VR 技術のこと書いていただきましたけれども、NTT ドコモが記者発表されていたんですが、70代でスマートフォンを保有する比率が70%を超えたという情報がございました。そう考えると、特に AR の技術は、スマートフォンと親和性が高いので、ご自身が持つスマホを使ってガイドンス活用ができるとも思いますので、中身の楽しさの演出や楽しさの工夫を検討していただきたいです。

例えば歴史学習だとか調査研究成果といったところについては、強く一般の観光客に発信をし過ぎると、逆に観光客の方を集めることができない可能性もありますので、「知の拠点と観光の基点」の両立のバランスを見ながら、検討していただけますと幸いです。ありがとうございました。

【事務局】北折様、ありがとうございました。それでは木村様、お願いできますでしょうか。

【木村オブザーバー】名古屋市博物館も昭和に建てた建物で古くなりまして、大規模改修にこれから入り、令和8年に一部がオープンします。そういう意味では、こちらの博物館と似たような、数年の違いはあれど同じような時代にオープンする博物館になるかと思えます。そういうことで申しますと、「p.1 博物館に求められる新たな役割」という点が重要だと考えます。社会的包摂や福祉について、具体的にどのように関わるのかという観点は、両館ともにこれから大事なことになるのかなと思えます。

古池先生が子供たちについて言及していただきまして、名古屋市博物館は名古屋市教育委員会の所属ですので、子供たちとの関係ってというのが重要であるところなのですが、例えば学校との連携についても、こちらが提供しようとしているものと学校の先生方が求めているもののマッチングはとても難しく、ちょっとしたことで現場のニーズに合わないこととなります。学校との連携についての私たちの経験は、名古屋城の博物館にも提供できればと思います。それから2点目に、田沢先生がおっしゃられた障害者の方、海外からのお客様というお話ありましたが、私が気を配ってるもうひとつのことは、やっぱり多様性です。これから多様なお客様に対応することが必須ということになるかと思えます。名古屋市博物館はもう基本計画は終えて設計に入る年なんですけど、ちょうど今年当事者の方から色々ご意見を伺っております。名古屋城博物館はその段階かもう少し前には当事者の方のご意見を聞かれると思いますが、想像していなかった

話を多く聞けると思いますので、それは大事にしていただければなと思います。以上です。

【事務局】木村様、ありがとうございました。それでは、全体を通じましてご助言やご意見等ございましたら賜りたいのですがいかがでしょうか。

【佐々木委員】先ほどオブザーバーの方が言われていたことで、私も同感のところがあります。大須は、名古屋城と熱田神宮とのほぼ等間隔に位置しており、名古屋城と大須観音と熱田神宮はひとつのつながりがある。

名古屋駅と栄を横につなぐ軸だけではなく、縦の軸として、名古屋城と堀川が堀川クルーズでつながり、大須観音、熱田神宮も含め、一つの歴史軸になるので、それは重視してほしいと思います。

【事務局】ありがとうございました。多くのご意見を頂戴しまして、我々は非常に参考になると考えております。まだまだ構想の策定は今6章のうちの4章ですので、今後年度末を目標に、より良いものができるように頑張っていきたいと思っておりますので、引き続き先生方、ご指導ご鞭撻の方お願いしたいと考えております。

本日予定していたものは以上でございますので、これをもちまして本日の懇談会を終了ということにさせていただきますと思います。先生方、長時間にわたりまして、誠にありがとうございました。